

就職活動を通じた女子大学生のキャリア発達

井森 澄江¹⁾ 伏見 友里²⁾

Female Students Career Exploration Through the Job Search Process

Sumie IMORI Yuri FUSHIMI

要旨

本研究の目的は、就職活動が本格化される大学4年次における女子大学生がその活動を通して如何にアイデンティティを成熟させ、自己を理解し、キャリア選択を深化させていくかを探ることである。対象は73名の女子大学4年生。同一性地位尺度、IPA (Inventory of Peer Attachment)、QOSL (Quality of Student Life)、ライフキャリアレインボー表、などからなる質問紙を4年進級時と卒業時に実施した。その結果、多くの女子大学生は就職活動という課題探求を通して、アイデンティティを成熟させ、大学卒業時には労働者・家庭人など複数の役割を組み合わせた将来のキャリア設計を行っていることが示された。しかし、少数ではあるが、アイデンティティを成熟させることができなかった学生もあり、その中には、将来のキャリアをうまく設計できていないケースも見られた。

キーワード：キャリア、就職活動、女子大学生、自我形成、質問紙調査

目的

本研究の目的は、その多くが専門職を目指す学科に所属する女子大学生が、就職活動の本格化する大学4年次においてその活動を通して如何にアイデンティティを成熟させ、自己を理解し、キャリア選択を深化させていくかを探ることである。

キャリア選択は就職するときだけではなく、生涯の様々な時期で行われていくものである。Superのキャリア発達理論(1957¹⁾)ではその中心に自己概念の充実を置き、成長期(0~14歳)、探索期(15~24歳)、確立期(24~44歳)、維持期(44~64歳)、下降期(65歳以上)に分けている。成長期~確立期ではさらに時期が細分化されており、探索期は「自分なりの志望職業が出てくる暫定期15~17歳」、「現実的に考え

始める移行期18~21歳」、「はっきりと自分に合った職業を選ぼうとする移行期21~24歳」に分かれる。また、Superは人の生涯は職業人(労働者)としての役割だけでなく、学生、市民、家庭人等様々な役割があり、生涯にわたる全生活空間にキャリアを位置づける必要があるとして、ライフキャリアを概念図化しライフキャリアレインボー(「キャリアの虹」)で表した(Super, 1980²⁾, Gothard, 2001³⁾)。中学校・高等学校進路指導資料(1992⁴⁾)にもSuperの理論からキャリア発達について「人は誕生から乳幼児期、青年期、成人期、そして老年期を通して、その時期にふさわしい適応能力、つまり環境に効果的あるいは有能に相互交渉する能力や態度を形成していく。その中で、社会との相互関係を保ちつつ、自分らしい生き方を展望し、実現していく過程がキャリア発達なのである。社会との相互関係を保つとは、言い換えれば、社会における自己の立場に応じた役割を果

1) 東京家政大学人文学部教育福祉学科発達心理研究室

2) 東京家政大学人文学部教育福祉学科

たすということ。人は生涯の中で、さまざまな役割を、その時々自分にとっての重要性や意味に応じて果たしていこうとする。それが『自分らしい生き方』であり、『自分と働くこと』との関係付けや価値観（キャリア）が形成されていく。

『自分に期待される複数の役割を統合して、自分らしい生き方を展望し、実現していく』ということを図の『キャリアの虹』にそくして見ることができる。」と述べられている。

本研究の目的の一つはこのライフキャリアレインボーから現代の女子学生が大学時代をいかに位置付けているのか、特に職業的選択を迫られたすえ決定をした状態にある大学4年卒業時において、将来含めてどのようなライフキャリア発達をさせているかを検討することにある。

さらに、職業的選択のような、特定の領域において課題探求に迫られる時期においては、意思決定のためにアイデンティティーの変容がなされ、自己理解が深められると考えられる。Grotevant (1987⁵⁾) のアイデンティティー形成プロセスモデルでは、課題探求を強要するような状況から探求にかかわるための方向付けがなされ、5つの下位プロセス（期待と確信・探求・投入・競合する力・中間評価）を含む探求のプロセスに従事する中で、失敗・成功に伴う否定的・肯定的感情、新しい情報のアイデンティティーへの取入れ・新しい情報による既存のアイデンティティーの変容が生み出される。この感情、認知的結果は新しくアイデンティティー感覚に強化／統合され、強化／統合されたアイデンティティーの感覚は、現在の環境との適合性という観点から評価される。このような一連のプロセスの中でアイデンティティーの成熟、自己理解の深化が促されると考える。しかし、高村 (1997⁶⁾) の大学4年男子学生・女

子学生の縦断面接研究では22ケース中13名 (59.1%) はこのGrotevantのモデルに沿ったプロセスを示したが、残り9名はこのモデルに従っておらず、それらは次の4パターンに分けられた。①課題に対して主体的な探求・関与を行わず、先送りしている②課題に対して主体的な探求を行うが、重要な他者の基準のような規範に従った課題探求を行っており、課題探求行動とアイデンティティー探求が分離している③課題探求とアイデンティティー探求の相互のやり取りがなく、探求プロセスでの結果がアイデンティティーの変容に結びつかない④課題探求のはじめに立てた計画がスムーズに進み、決定したため自己を再考するきっかけがなくアイデンティティーの変容がみられない。

本研究では大学4年女子学生に対する進級時と卒業時の縦断質問紙調査から進路決定（職業選択）という課題探求の過程で生じるアイデンティティーの探求、自己理解の深化の様相について、高村 (1997) の提出した順調に進まないパターンも含め、検討する。また、それと、ライフキャリア発達との関係についても検討する。

本報告の具体的目的は以下の通りである。

- ① ライフキャリアレインボーの視点から、女子大学生が大学卒業までにいかなるキャリア発達を成し遂げているかを明らかにする。
- ② 大学4年進級時と卒業時の自我同一性の地位および大学生活の質（自信、体調、将来展望、充実度）、仲間愛着（コミュニケーション、信頼、疎外感）の変動の様相から、就職活動という課題探求がアイデンティティーの成熟にどのように影響するかを検討する。
- ③ 卒業時における自我同一性の地位とライ

フューリアインボーとの関連から、大学時のアイデンティティの成熟がキャリア設計にどのように関わっているのか検討する。

方法

1. 対象者：首都圏A女子大学4年生78名 平均範囲21～22歳（第1回調査時）
2. 実施時期：第1回調査201X年3月下旬、第2回調査201X+1年3月下旬
3. 実施方法：4年進級オリエンテーション時（第1回調査201X年3月下旬）と卒業クラス懇談会時（第2回調査201X+1年3月下旬）に対象者に質問紙を配付、回答を依頼し、その場で回収した。その際、教示としてこの調査は成績とは関係がないこと、回答を強制するものではないこと等を伝えた。

4. 質問紙の構成

[4年進級時第1回調査の質問紙]

フェイスシート、評定尺度、多肢選択・自由記述項目からなる。

- (1) フェイスシート（学籍番号、年齢、家族構成、現在の居住形態等）
- (2) 評定尺度：ARS (Affective Relationships Scale) 愛情の関係尺度 (Takahashi, 1990⁷⁾, Takahashi & Sakamoto, 2000⁸⁾) 12項目 (5段階評定)、IPPA (The Inventory of Parent and Peer Attachment) (Armsden & Greenberg, 1987⁹⁾) のうちのIPA仲間への愛着尺度 (Inventory of Peer Attachment) 25項目 (4段階評定)、QOSL (Quality of Student Life) 大学生活の質尺度 (中澤ら, 2007¹⁰⁾) 32項目 (2段階評定)、SPSI-R (Social Problem Solving Inventory-R) 社会的問題解決力尺度 (中澤ら, 2007¹⁰⁾) (5段階評定)、同一性地位判定尺度12項目 (加藤, 1983¹¹⁾) (6段階評定)。

(3) 多肢選択・自由記述項目：この1年の目標は何か、大学に入ってから一番つらかったこと・一番うれしかったことたのしかったこと、大学進学・在学理由、卒業後の希望進路・生き方等

[4年卒業時第2回調査の質問紙]

フェイスシート、評定尺度、多肢選択・自由記述項目からなる。

- (1) フェイスシート（学籍番号、年齢）
- (2) 評定尺度：（4年進級時の質問紙に含まれていた6評定尺度のうちARS愛情の関係尺度 (Takahashi, 1990⁷⁾, Takahashi & Sakamoto, 2000⁸⁾) 12項目を除いた5評定尺度)

IPA仲間への愛着尺度25項目 (4段階評定)、QOSL 大学生活の質尺度 (中澤ら, 2007¹⁰⁾) 32項目 (2段階評定)、SPSI-R 社会的問題解決力尺度 (中澤ら, 2007¹⁰⁾) (5段階評定)、同一性地位判定尺度12項目 (加藤, 1983¹¹⁾) (6段階評定)。

(3) 多肢選択・自由記述項目：この1年の目標は何だったか、この1年で一番つらかったこと・一番うれしかったことたのしかったこと、この1年間でどのような点が成長したと思うかそれは何によって培われたか、未来について、ライフキャリアインボー、学外実習の経験、卒業後の進路・大学で取得した資格等

本報告では主に(2)のIPA仲間への愛着尺度、QOSL 大学生活の質・適応尺度、同一性地位判定尺度および(3)のライフキャリアインボー (第2回調査においてのみ実施) について取り上げる。同一性地位判定尺度の詳細については、伏見・井森 (2017¹²⁾ 2018¹³⁾) 参照のこと。

1) IPA仲間への愛着尺度：大学生の仲間への愛着の測定を測定するために、Armsden & Greenberg (1987) により青年期の親および仲

間への愛着を測定するために開発された IPPA (Inventory of Parent and Peer Attachment) のうちの IPA 仲間への愛着尺度 (Inventory of Peer Attachment) を使用した。IPPA (Armsden & Greenberg, 1987⁹⁾) は愛着に関する Bowlby の理論に基づき、青年期の愛着対象への応答性や接近可能性に関する信頼感や愛着対象への怒り、愛着対象からの無関心について評価する 60 項目 (親への愛着 31 項目、仲間への愛着 29 項目) をもとに大学生を対象に尺度化したもので、信頼 (trust) 10 項目、コミュニケーション (communication) 10 項目、疎外 (alienation) 8 項目の 3 下位尺度からなる IPA 親への愛着尺度 (Inventory of Parent Attachment) と信頼 (trust) 10 項目、コミュニケーション (communication) 8 項目、疎外 (alienation) 7 項目の 3 下位尺度からなる IPA 仲間への愛着尺度 (Inventory of Peer Attachment) からなる。今回は IPA 仲間への愛着尺度 25 項目について 4 段階 (4 : 当てはまる ~ 1 : 当てはまらない) で評定してもらった。ただし、分析においては、この 25 項目に関して 4 年進級時の今回の対象者を含む女子大学生の 222 名のデータに基づいて因子分析を行い再構成した、コミュニケーション 8 項目 (「友達に私が困っている問題を話すように励ましてくれる」等)、信頼 4 項目 (「私は友達を信頼している」等)、疎外 3 項目 (「私は友達に腹が立っている」等) 計 15 項目からなる IPA 仲間愛着尺度 (井森・伏見, 2017¹⁴⁾) の項目を用いた。

2) QOSL 大学生活の質・適応尺度 : 大学生の大学生活の質・適応の査定として、福盛ら (2002¹⁵⁾) によって開発された 45 項目からなる大学生の QOL を測定する尺度「大学生活チェックカタログ 45 (QOSL)」に関して、677 名の大学生データに基づき因子分析を行って再

構成された尺度 (中澤ら, 2007¹⁰⁾) を使用した。この QOSL (中澤ら, 2007¹⁰⁾) は生活充実感 13 項目 (「大学生活が充実している」等)、自信欠如 6 項目 (「何をするにも自信がない」等)、体調不良 7 項目 (「体調不良に悩まされている」等)、将来展望 6 項目 (「将来どんな職業に就くのか、ある程度の方向を決めている」等) の 4 下位尺度 32 項目からなる。回答は 2 件法 (はい、いいえ) とし、各項目で各下位尺度名に即した回答をした場合に 1 点を与えた。

生活充実感は 13 点満点、自信欠如 6 点満点、体調不良 7 点満点、将来展望 6 点満点である。

なお、卒業時の将来展望 6 項目に関しては、文頭に「3, 4 年になった時には」という前提を加えた上、項目の文を現在形から過去形に直したものを用いた (「3, 4 年になった時には将来どんな職業に就くのか、ある程度の方向を決めていた」、「3, 4 年になった時には少なくとも 2, 3 の講義やゼミに意欲的に出ていた」等)。また、体調不良 7 項目のうちの 1 項目に関しても文頭に「大学時代には」という前提を加えた上、項目の文を現在形から過去形に直したものを用いた (「大学時代、学生生活を送る上で経済的な不安があった」)。

3) ライフキャリアレインボー : キャリア発達を検討するために、早稲田・佐賀 21 世紀子どもプロジェクトの教師に対する「ライフ・キャリア・レインボー・ワークショップ」で使用された質問項目表を参考に、ライフキャリアレインボー表を作成し、いかなるキャリアが形成され、いかなるキャリアを展望しているかを捉えた。具体的には、子ども・学生・余暇人・市民・労働者・家庭人・その他の役割といった 7 つそれぞれの役割に対し、大学 1 ~ 3 年生までに、また大学 4 年生において時間とエネルギーをかけていた割合 (%) をそれぞれで合計が 100% に

なるように回答を求めた。また、6カ月後、10年後においてその割合がどうなっているか予想して回答するよう求めた。

結果と考察

1. 女子大学生のキャリア発達

子ども・学生・余暇人・市民・労働者・家庭

人・その他の役割といった7つそれぞれの役割に対し大学1～3年生時、4年生時においてかけた時間とエネルギーの割合、また6カ月後、10年後に各役割にかけると予想する時間とエネルギーの割合(%)の平均値と標準偏差を表1に示した。

表1 各時期に各役割に割り振る時間とエネルギーの割合(%) N=73

	大学1～3年生		大学4年生		6か月後		10年後	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
子ども—時間	13.97	10.24	12.94	11.44	12.53	11.94	14.12	12.09
子ども—エネルギー	12.10	11.13	11.61	11.54	11.83	11.76	14.35	12.98
学生—時間	35.72	19.75	46.50	26.17	8.63	15.92	3.71	6.62
学生—エネルギー	35.58	19.68	49.01	27.00	9.61	17.56	3.62	6.58
余暇人—時間	24.16	14.02	20.69	15.56	15.56	10.38	13.57	9.17
余暇人—エネルギー	25.74	17.05	22.09	18.90	15.72	11.58	13.93	10.72
市民—時間	2.51	4.36	2.09	3.68	4.53	6.16	6.54	6.30
市民—エネルギー	3.01	6.65	2.01	3.84	4.30	6.12	6.43	6.36
労働者—時間	18.88	14.31	12.32	14.41	51.56	22.99	33.38	18.27
労働者—エネルギー	20.35	15.99	11.35	13.35	53.39	21.58	32.68	18.04
家庭人—時間	0.93	2.59	0.81	3.07	1.54	5.27	24.34	18.38
家庭人—エネルギー	0.87	2.57	0.80	3.05	1.13	3.83	27.54	18.94
その他—時間	2.34	8.99	2.22	5.42	2.60	6.37	0.96	2.48
その他—エネルギー	2.64	9.46	2.19	5.25	2.20	5.65	0.87	2.42

(1) 大学時代の位置づけと大学4年生の意味

大学1～3年生時と大学4年生時の時間とエネルギーの割合をみると、家庭人としての役割は一基本親元を離れて(家庭を持って)からの役割であるので—どちらにおいても約1%と少なかった。その他の役割も2%程度、市民としての役割も2～3%と少なかった。この家庭・市民・その他の役割のSDはそれぞれの平均より大きく、それぞれの代表値はさらに小さいと考えられることから、大学時代は子ども・学生・余暇人・労働者の4つの役割を演じている時期といえる。

その中で子どもとしての役割(すなわち親との関係における自分、親に対して注がれる)エ

ネルギーはどちらの時期でも約12%、時間は13～14%を占めていた。

学生としての役割は当然ながら大学のどちらの時期でも一番多くの時間とエネルギーを占めていた。大学1～3年生時で学生としての役割(学び)の時間・エネルギーは35.7%・35.6%であった。4年生では46.5%・49.0%と4年生時で学びかける時間・エネルギーが大幅に増加していることが示された。また、4年生時では時間の割合に比べエネルギーの割合が高くなっており、大学4年生時における投入への積極性が窺われた。

余暇人としての役割(趣味やスポーツなど好きなことをする)時間・エネルギーは大学1～

3年生時で24.2%・25.7%、大学4年生時で20.7%・22.1%で、4年生時においてやや減少していることが示された。また、労働者としての役割（仕事をする）時間・エネルギーも大学1～3年生時で18.9%・20.4%、大学4年生時で12.3%・11.4%で、4年生時において減少していることが示された。大学生の場合労働者としての役割は具体的にはアルバイトと考えられるが、大学1～3年生時では時間よりエネルギーの割合が高く、アルバイトへの自己投入が窺われた。逆に4年生時では時間も減少しているが、時間よりエネルギーの割合が低くなっており、アルバイトの目的、意味が大学1～3年生時とは異なっていると考えられる。

職業選択という課題探求の中で4年生時においては、1～3年生時より、余暇人の役割、労働者の役割を減少させ、学生の役割（学び）に多くの時間・エネルギーを費やし課題への投資、自己投入を行っていた。

(2) 6カ月後、10年後の予想からみる女子大学生のキャリア設計

その他の役割に関しては、時間・エネルギーとも6カ月後は大学時代と同様2%程度であり、10年後は1%未満と若干減っていた。市民としての役割は大学時代の2～3%から6カ月後には4～5%、10年後は6～7%と若干増えていた。但し、この2つの役割が占める割合は4つの時期を通して少ない（10年後の市民の役割以外、SDがそれぞれの平均より大きく、それぞれの代表値はさらに小さいと考えられる）。また、大学時代、特に4年生時では約5割と、最も多くの時間・エネルギーの割合を占めていた学生の役割は6カ月後には8.6%・9.6%、10年後には3.7%・3.6%と減少していた。6カ月後、10年後は子ども・余暇人・労働者・家庭人の4つの役割を演じている時期と言

えるだろう。

その中で、子どもの役割の時間・エネルギーは6カ月後も大学時代と同様12%・13%程度であり、10年後は14%・14%と若干増えてはいるものの、4期を通してその役割が占める割合にはほとんど変動がみられない。また、余暇人の役割の時間・エネルギーは、大学時代の1～3年生時24.2%・25.7%を最高に、4年生時20.7%・22.1%、6カ月後15.6%・15.7%、10年後13.6%・13.9%と4期の中では時期を経るにつれて減少していた。

これに対して、労働者の役割の時間・エネルギーは6カ月後51.6%・53.4%と大半を占めるようになる。10年後には33.4%・32.7%と減少するものの、7つの役割の中で最も多い割合を占めている。そして家庭人の役割時間・エネルギーは6カ月後では大学時代とほぼ同様1%程度だが、10年後は24.3%・27.5%と大幅に増加していた。

女子大学生のキャリア発達において、10年後の家庭人の役割の時間・エネルギーの急増には、家庭人の役割に親の役割も含んでいることによると考えられる（Superは今回の7つの役割に親の役割を加えた8つの役割（ライフロール）を提案したが、今回は親の役割を家庭人の役割の中を含めた）。この10年後の労働者の役割の減少、家庭人の急増は自己実現のためのライフ・ワーク・バランスの視点から将来設計が行われていることを示していると考えられる。ただし、すべての時期どの役割においても平均値に対して標準偏差が大きい傾向があり、個人差が大きいと考えられる。そこで、3節で卒業時の自我同一性の地位による違いから、アイデンティティーの成熟とキャリア設計との関連を検討する。

2. 大学4年次における自己理解の深化、アイデンティティーの変容

自己理解の深化の指標として今回、自信欠如、体調不良、充実度、将来展望という4つの下位尺度からなるQOSLの得点の変化を用いる。また自己理解の深化の補完的側面の指標としてコミュニケーション、信頼、疎外という3つの下位尺度からなるIPA仲間愛着の得点の変化も用いる。またアイデンティティーの変容の指標としては同一性地位尺度から算出される得点の地位の変動を用いた。

(1) QOSL 得点の変化

表2に4年進級時と4年卒業時のQOSLの各下位尺度平均値と標準偏差を示した。また、4年進級時と4年卒業時の比較を行うためt検定を行った結果、自信欠如得点、体調不良得点、

生活充実得点で有意な差がみられた。

自信欠如得点(最高得点6点)は3.27から2.67と有意に減少しており($t(71) = 3.91, p < .001$)、進級時に比べて卒業時には自信をつけていることが示された。また、体調不良得点(最高得点7点)も2.00から1.32と有意に減少しており($t(71) = 4.51, p < .001$)、進級時に比べて卒業時にはより元気で快調であることが示された。生活充実得点(最高得点13点)は9.51から10.32と有意に増加しており($t(71) = -3.11, p < .001$)、進級時に比べて卒業時にはより充実感を感じていることが示された。また将来展望得点(最高得点6点)は4.55から4.81と有意差はないものの数値的に増加していた。4年進級時から卒業時の間(4年次)において自己理解が深まったことが示唆された。

表2 4年進級時と4年卒業時のQOSLの各下位尺度平均値(SD) N=72

		平均	SD	t 値	自由度	有意確率
生活充実度	進級時	9.51	(2.91)	-3.11 ***	71	.00
	卒業時	10.32	(2.42)			
自信欠如	進級時	3.27	(1.89)	3.91 ***	71	.00
	卒業時	2.67	(1.67)			
体調不良	進級時	2.00	(1.53)	4.51 ***	71	.00
	卒業時	1.32	(1.24)			
将来展望	進級時	4.55	(1.63)	-1.52	71	.13
	卒業時	4.81	(1.36)			

*** $p < .001$

(2) IPA 仲間愛着の得点の変化

表3に4年進級時と4年卒業時のIPA仲間愛着の各下位尺度の項目平均値と標準偏差を示した(項目平均得点の最高得点はどの下位尺度でも4点である)。また、4年進級時と4年卒業時の比較を行うためt検定を行った結果、疎外得点、コミュニケーション得点で有意な差が

みられた。

疎外項目平均得点は1.99から1.14と有意に減少しており($t(72) = 19.11, p < .001$)、進級時に比べて卒業時に仲間に対する親和性が増していることが示された。コミュニケーション項目平均得点は3.14から3.31と有意に増加しており($t(72) = -3.89, p < .001$)、また、信

頼項目平均得点も3.10から3.17と有意差はないものの数値的に増加しており、卒業時は進級時と比べて、信頼のもと仲間との関係がより深くなり、他者理解が促進されていることが示され

た。仲間関係、他者理解といった自己理解の相補的側面の指標からも4年進級時から卒業時の間（4年次）において自己理解が深まっていることが示唆された。

表3 4年進級時と4年卒業時のIPA 仲間愛着の各下位尺度の項目平均値 (SD) N=73

		平均	SD	t 値	自由度	有意確率
コミュニケーション	進級時	3.14	(.54)	-3.89 ***	72	.00
	卒業時	3.30	(.54)			
信頼	進級時	3.10	(.46)	-1.44	72	.16
	卒業時	3.17	(.36)			
疎外	進級時	1.99	(.27)	19.11 ***	72	.00
	卒業時	1.14	(.35)			

*** $p < .001$

(3) 同一性地位の変化

表4に4年進級時と4年卒業時の同一性地位6タイプの各人数、および6タイプ別の4年進級時と4年卒業時ともに同じタイプであった人数を示した。また、4年進級時と4年卒業時ともにそのタイプであった人数÷(4年進級時のみそのタイプの人数+4年卒業時のみそのタイ

プの人数+4年進級時と4年卒業時ともにそのタイプであった人数)×100で算出したタイプ不変率%-4年進級時と4年卒業時でタイプが変わらない割合-も表4に示した。なお、自我同一性地位尺度、自我同一性地位の判定等の詳細に関しては、伏見・井森(2017¹²⁾、2018¹³⁾を参照のこと。

表4 進級時・卒業時の同一性の各地位の人数と地位不変率

同一性地位	4年進級時(n)	4年卒業時(n)	進級卒業同地位(n)	不変率(%)
同一性達成 (A)	7	6	4	44.4
権威受容 (F)	4	4	2	33.3
A-F 中間	6	9	2	15.3
積極的モラトリアム (M)	7	4	1	10.0
同一性拡散 (D)	6	6	3	33.3
D-M 中間	4 3	4 4	3 5	67.3
合計	7 3	7 3	4 7	(64.4*)

*変動のなかったものの割合 (%)

全体的には4年進級時と4年卒業時に同一性地位に変動がないものは今回の対象73名中47名(64%)であり、残りの26名(36%)は同一性地位を変動させていた。

同一性のタイプ不変率をみると、現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を求めている積極的モラトリアムが最も不変率が低く、次に中程度の危機を体験したうえ

で、現在高い水準の自己投入を行っているA-F中間の不変率が低かった。職業選択という課題探求の過程においては既存のアイデンティティーの探求、変容が生じていることが示唆された。ただし、D-M中間が多いことは加藤(1983¹¹⁾)の研究でも示されており、D-M中間が多いことまたその不変率の高いことは大学生の特徴といえるかもしれない。

3. アイデンティティーの成熟とキャリア設計

前節2.(3)の同一性地位において同一性達成にあるものは、過去に高い水準の危機を経験したうえで、現在高い水準の自己投入を行っているものである。すなわち課題探求のプロセスにおいて生じる失敗・成功に伴う否定的・肯定的な感情的結果や新しい情報のアイデンティティーの取入れ、新しい情報によるアイデンティティーの変容の認知的結果を新しくアイデンティティー感覚に強化統合し得た結果、高い水準の自己投入を行っている状態である。したがって、同一性達成にあるものは課題探求のプロセスにおいてこれまでに形成されたアイデンティティーがより成熟したものと見える。一方、同一性地位において同一性拡散にあるものは、現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱いものである。すなわち課題探求に対して主体的な探求を行わない又は課題探求プロセスの中で情報をうまく取り入れられない等によりアイデンティティー形成が順調に行われず、したがってアイデンティティーが成熟しなかったと考えられる。

そこで、この同一性地位において同一性達成にあるものと同一性拡散にあるものの、ライフキャリアレインボーから、アイデンティティーの成熟とキャリア設計のどのような関連があるかを見ることとする。

表5に大学卒業時に同一性達成と判定された6名(A-1~A-6)の、また表6に大学卒業時に同一性拡散と判定された6名(D-1~D-6)の、大学1~3年生時、大学4年生時、6カ月後、10年後の各時期において、全体平均で最も多くの時間・エネルギーの割合を占めていた役割(表1参照)の各個人の割合(%)を示した。なお、10年後に関しては全体平均で2番目に多い役割についても、増加がその期に顕著であり、かつ、かなりの割合を占めることから、その個人の割合を示した。また、個人で最も多くの割合を占める役割がそれと異なる役割の場合は、()に個人の最も多くの割合を占める役割と割合を示した。なお、()の学は学生の役割、子は子どもの役割、労は労働者の役割、家は家庭人の役割、余は余暇人の役割、他はその他の役割を表している。

(1) 同一性達成のライフキャリアレインボー

大学卒業時に同一性達成と判定された6名のうちの5名(A-2、A-3、A-4、A-5、A-6)は大学卒業後職業に就くという決定をしたもの、1名(A-1)は大学卒業後さらに学んで6カ月後において職業に就くという決定をしたものである。前者をパターン①、後者をパターン②とする。

パターン①の場合共通しているのは、大学4年生時において学生の役割に最も多くの時間とエネルギーをかけ、自己投入していることである。また、10年後において労働者の役割と家庭人の役割に時間・エネルギーの大半(60%~80%)を割り振っていることである。パターン②の場合は時期がずれており、6カ月後に学生の役割が最も多くなっている。これは時期がずれているが自己投入ということで①と共通しているといえる。また、10年後において労働者の役割と家

表5 4年卒業時同一性達成者の各期の主たる役割への時間エネルギー配分割合(%)

	1~3年生時 学生の役割		4年生時 学生の役割		6カ月後 労働者役割		10年後 労働者役割		10年後 家庭人役割	
	時間	エネルギー	時間	エネルギー	時間	エネルギー	時間	エネルギー	時間	エネルギー
A-1	10	10	30	30	10	10	70	70	0	0
	(労60)	(50)	(労30)	(30)	(学80)	(80)				
A-2	20	20	75	85	40	60	20	30	40	40
	(労40)	(40)								
A-3	20	30	60	80	40	60	30	30	40	40
	(労30)	(40)								
A-4	30	25	30	50	60	70	40	40	40	40
	(市20)	(30)								
A-5	50	50	70	70	30	30	40	40	40	40
					(子40)	(40)				
A-6	70	70	70	80	30	30	30	30	30	30
					(子40)	(40)				

表6 4年卒業時同一性拡散者の各期の主たる役割への時間エネルギー配分割合(%)

	1~3年生時 学生の役割		4年生時 学生の役割		6カ月後 労働者役割		10年後 労働者役割		10年後 家庭人役割	
	時間	エネルギー	時間	エネルギー	時間	エネルギー	時間	エネルギー	時間	エネルギー
D-1	10	10	20	20	50	50	40	40	25	25
	(余90)	(90)	(余80)	(80)						
D-2	20	20	15	15	15	15	10	10	10	10
	(余30)	(30)	(余40)	(40)	(余20)	(20)				
	(労30)	(30)			(家20)	(20)				
					(他20)	(20)				
D-3	20	20	30	30	35	35	30	30	25	25
	(子40)	(40)	(子60)	(50)	(子60)	(60)				
D-4	25	10	5	5	80	80	35	20	40	60
	(余40)	(70)	(労50)	(50)						
D-5	50	50	20	20	70	70	50	50	15	15
			(子40)	(40)						
			(余40)	(40)						
D-6	60	80	70	80	0	0	0	0	0	0
					(0)	(0)				

庭人の役割に時間・エネルギーの大半（60%～80%）を割り振っていることは①と共通していた。

同一性達成の場合、職業選択という課題探求プロセスの中で自己理解を深化させ、自己実現のためのライフ・ワーク・バランスの視点から将来設計が行われていることを示していると考えられる。

（2）同一性拡散のライフキャリアレインボー

大学卒業時に同一性拡散と判定された6名のうちの5名は同一性達成パターン①で見られた大学4年生時の学生の役割に対する自己投入が低かった。大学4年生時に学生の役割ではなく余暇人、労働者、子どもといった役割に多くの時間・エネルギーを使っていた。これを同一性拡散パターン③とする。同一性拡散と判定された6名のうちの1名は大学4年生時に同一性達成パターン①と同様学生の役割に最も多くの時間とエネルギーをかけ、自己投入していた。これを同一性拡散パターン④とする。

同一性拡散パターン④D-6の場合4年進級時において同一性達成の地位にあった。1～3年生時の学生の役割の時間・エネルギー割合も高く、4年生での職業選択という課題探求に直面し、それに積極的に関与したと考えられる。しかしその課題探求プロセスの中で得た感情的認知的結果をアイデンティティーにうまく取り入れることができず、同一性拡散に至ったと考えられる。この場合、将来のキャリア設計はまったく描けていない。同一性拡散パターン③は4年生時の学生の役割の時間・エネルギーの割合が低いことが特徴であるが、さらに6カ月後の労働者の役割の時間・エネルギーの割合が高いパターン③-1（D-1, D-4, D-5）、と6カ月後の労働者の役割の時間・エネルギーの割合が低いパターン③-2（D-2）に分かれた。

同一性拡散パターン③は課題に対して主体的、積極的関与がなされていないと考えられる。このうち、今回の大半の対象者と同じように6カ月後には労働者として役割を主たる役割としようとしている同一性拡散パターン③-1は10年後には、同一性達成パターン①②と同様、労働者の役割と家庭人の役割に時間・エネルギーの大半（60%～80%）を割り振っている。一方、6カ月後の労働者の役割の時間・エネルギーの割合が低い同一性拡散パターン③-2では10年後にも労働者の役割または家庭人の役割にわずかの時間・エネルギーしか割り振っていない。なお、D-3については、同一性拡散パターン③-2とも考えられるが、どの時期にも子どもとしての役割の割合が大きく、6カ月後も子どもとしての役割を多くとらざる負えないため労働者の役割が少ないだけで、本来は同一性拡散パターン③-1とするのが妥当と思われる。10年後には同一性達成パターン①②や同一性拡散パターン③-1よりやや少ないが、労働者の役割と家庭人の役割に時間・エネルギーの大半（55%）を割り振っている。

同一性拡散の場合、職業選択という課題探求プロセスの中でアイデンティティー形成が順調になされず、将来のキャリア設計がうまく行われないことがあることが示唆された。

まとめと今後の課題

1. 今回の調査では、女子大学生は職業選択という課題探求に直面する4年次において、1～3年生時より、余暇人の役割、労働者の役割を減少させ、学生の役割に多くの時間エネルギーを費やし、課題に積極的に取り組み自己を投入していたことが示された。そして10年後においては Erikson の成人期の課題「生殖性」「生産性」に沿った労働者と家庭人（親

を含む)という役割をその中心に据え、かつ、自己実現のためのワークバランスを考慮したキャリア設計をしていることが示された。なお、このキャリア設計に関しては個人によりかなり異なっていることも示唆された。

今回の調査は専門職をめざす女子大学生を対象に行われた。今後は様々な分野専攻の女子大学生を対象にそのキャリア設計(キャリア発達)を検討していく必要がある。

2. また、今回の調査では4年進級時より卒業時において自信があり、体調が良く、充実しており、仲間との親密性やコミュニケーションが増加することが示された。このことから大学4年での就職活動という課題探求のプロセスにおいて、自己理解が深まり、アイデンティティーの成熟がなされると考察した。

ただし、今回の調査対象者の大半は卒業直前に行われる国家試験に向けて、小グループでの協同学習を行っていた。また学外での実習も体験していた。これらは課題探求のプロセスに含まれるものではあるが、この協同学習、実習体験が仲間との親密性やコミュニケーション、自信や充実感の増加に、そして自己理解の深化やアイデンティティーの成熟に与える影響について、明らかにしていく必要があると考える。

3. 今回の調査では、約三分の一(36%)の学生に4年進級時と卒業時に同一性地位に変動が示された。大学4年での就職活動という課題探求のプロセスにおいてアイデンティティーの変容がなされていると考えられた。また、卒業時に同一性地位によってキャリア設計に違いがみられることも明らかになった。即ち、卒業時に同一性達成の場合は10年後にはEriksonの成人期の課題「生殖性」に沿った労働者と家庭人という役割をその中心

に据えるという共通の傾向がみられた。一方、同一性拡散の場合には3つの異なるパターン—拡散パターン③-1では、10年後同一性達成の場合と同じく労働者と家庭人という役割をその中心に据える、拡散パターン③-2では、10年後労働者と家庭人という役割をほとんどとらない、拡散パターン④では、将来のキャリア設計を全く立てることのできない—がみられた。拡散パターン④に関しては4年進級時同一性達成であり、4年生時に(1~3年生時においても)学生の役割に多くの時間エネルギーを割り当てていたが、卒業時同一性拡散になっていた。課題探求のプロセスにおいてアイデンティティーが成熟するだけでなく、アイデンティティー形成に失敗してしまい、将来のキャリア設計が困難になる場合もあると考えられる。また、課題への取り組み自体がうまく行われな場合もあると考えられる。大学における進路指導、相談の必要性が示された。

これらの学生が、今後様々な課題との出会いの中で、アイデンティティーを成熟させ、その後いかなるキャリア設計をしていくようになるのか、追跡調査の中で検討していく必要がある。

付記

本研究にご協力くださいました皆様に感謝いたします。

文献

- 1) Super, D. E. 1957 The Psychology of Careers. New York: Harper Row.
- 2) Super, D. E. 1980 A life-span, life-space career development. Journal of Vocational Behavior, 16, 282-298

- 3) Gothard, B. 2001 Career development theory. In B. Gothard P. Mignot, M. Offer & M. Ruff, *Career Guidance in Context*, London : Sage, pp10-37
- 4) 文部省 1992 中学校・高等学校進路指導資料；第1分冊 個性を生かす進路指導を目指して：生き方の探求と自己実現への道程 海文堂出版
- 5) Grotevant, H. D. 1987 Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, 2, 203-222
- 6) 高村和代 1997 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて 教育心理学研究, 45, 3, 243-253
- 7) Takahashi, K. 1990 Affective relationships and lifelong development In P. B. Baltes, D. L. Featherman & R. M. Lerner (Eds.) *Lifespan development and Behavior*, Vol. 10 Hillsdale, NJ : Erlbaum. pp1-27
- 8) Takahashi, K., & Sakamoto, A. 2000 Assessing social relationships in adolescents and adults : Constructing and validating the affective relationships scale. *International Journal of Behavioral Development*, 24, 451-463
- 9) Armsden, G., & Greenberg, M. T. 1987 The Inventory of Parent and Peer Attachment : Individual differences and their relation to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454
- 10) 中澤潤・榎本淳子・中道圭人 2007 社会的問題解決が大学生の適応に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 61-69
- 11) 加藤厚1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302
- 12) 伏見友里・井森澄江 2017女子大学生の自我同一性地位と社会的問題解決能力との関連 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 17, 23-33
- 13) 伏見友里・井森澄江 2018女子大学生の自我同一性地位と社会的問題解決能力との関連 (2) 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 18, 93-104
- 14) 井森澄江・伏見友里 2017大学期における女子大学生の対人関係の形成と大学への適応 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 17, 35-51
- 15) 福盛英明・峰松修・一宮厚・馬場園明・永野純・上園慶子・藤野武彦・丸山徹 2002 大学生のQOLの研究(2)簡易版「大学生チェックカタログ45」の開発と実施 平成12-13年度科学研究費補助金研究成果報告書大学生の生活の質(Quality of Student Life)に関する研究—「大学生生活調査カタログ」の開発(代表者 峰松修) 13-32

Abstract

The purpose of the study is to investigate how fourth-year students in a women's university, who are all beginning in earnest to look for employment, improve themselves, grow as persons, and explore their careers through the job search process. We surveyed 73 students at a women's university using a questionnaire consisting of a life span career plan sheet, IPA (inventory of peer attachment), QOSL (quality of student life), and so forth. The students were surveyed when they entered the fourth grade and when they graduated from university.

The analysis shows that most of the students, who grew through the job search process, planned their future careers so that multiple roles such as laborer and family man were balanced. The analysis also showed that a few students who failed to establish themselves and that among them there existed cases where the students had failed to consider their future career.

Keywords : career, job search, female student, self-establishment, questionnaire